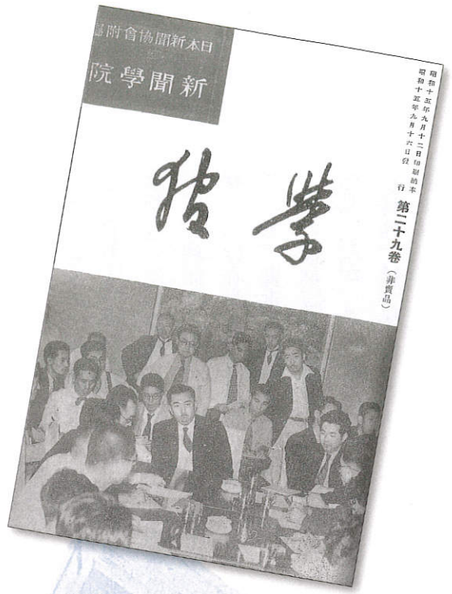
不二出版



新聞学院 学報

日本で最初の新聞人養成学校というべき「新聞学院」の機関誌を復刻！

復刻版 全4巻・別冊1

〈1932年5月～1942年10月〉

●発　行　新聞学院
●体　裁　A5判・上製・総1、742頁
●別　冊　解説・総目次・索引
（分売価格1、000円＋税）
ISBN978-4-8350-7771-0

●解　説　松野良一（中央大学総合政策学部教授）
大久保謙
●推　薦　春原昭彦（上智大学名誉教授）
●原本提供・山根康治郎氏
・東京大学大学院情報学環・学際情報学府図書室
・東京大学大学院法学政治学研究科附属
近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫
・日本新聞博物館
・群馬県立図書館

●刊　行　2015年2月
●揃 定 価　72、000円＋税
ISBN978-4-8350-7765-9

関連図書

復刻版 人物評論 全5巻・別冊1

大宅壮一 主宰
昭和8年～9年刊
別　冊＝解説（尾崎秀樹）・総目次・索引
体　裁＝菊判・上製・総2、524頁
推　薦＝小田切秀雄・佐高信・鶴見俊輔・松浦総三
揃定価＝85、000円＋税

「この密閉された室内に、涼風をもたらすものは誰ぞ！」（大宅壮一）。本誌は、言論・表現の自由が封殺されていく時代に、わずか一年余の短命ではあったがジャーナリスト大宅の旺盛な批評精神を体現した、人物・時事評論雑誌である。

痛烈な大宅の評論のほかに、作家・漫画家によるユニークで直截な評論・小説・画も多い。近代文学史・思想史・ジャーナリズム史研究そして現代のジャーナリズムにとって見過ごせない資料である。

復刻版 他山の石 全4巻・別冊1

桐生悠々 主宰
昭和9年～16年刊
別　冊＝解説（荒瀬豊）・総目次・索引
体　裁＝A4判・上製・函入・総1、490頁
推　薦＝家永三郎・井出孫六・太田雅夫・むのたけじ
揃定価＝60、000円＋税

本誌は、戦前期の反骨・不屈のジャーナリスト桐生悠々が主宰した個人雑誌である。当初は欧米の著作物を翻訳・紹介して国際状況の中での日本の立場を明らかにすることにつとめたが、現実への危機意識から、次第に憲法を盾として議会政治と国民の自由回復をくりかえし主張し、軍部による政治の危険を訴え、反戦を唱えるようになる。たび重なる弾圧・検閲にも挫けることなく抵抗し続けたひとりのジャーナリストの良心が脈打つ173冊を復刻。

復刻版 時局新聞 全2巻

長谷川国雄 編
昭和7年～11年刊
解説（犬丸義一）・解題（桑尾光太郎）・索引付き
体　裁＝B4判・上製・総674頁
推　薦＝犬丸義一・久野収・高橋新太郎
揃定価＝50、000円＋税

柳条湖事件の翌年に創刊された本紙は、体制迎合をあからさまにしていった一般新聞雑誌の堕落を憂い、鋭いジャーナリズム批判を貫いた希少メディアである。編集顧問に青野季吉・大宅壮一・鈴木茂三郎らを迎え、反ファシズム色を鮮明にし、それゆえに度々の発禁に遭ったが、都市労働者や農民を中心に読者層を広げた。戦争に突き進む日本帝国主義に歯止めをかける戦線統一の可能性をはらんでいた本誌を近代史研究の貴重な資料として復刻。

復刻版 現代新聞批判 全7巻・別冊1

太田梶太 主宰
昭和8年～18年刊
別　冊＝解説（門奈直樹）・総目次・索引
体　裁＝A4判・上製・総2、676頁
推　薦＝荒瀬豊・家永三郎・尾崎秀樹・久野収
揃定価＝140、000円＋税

本紙は『大阪朝日新聞』出身のジャーナリスト太田梶太が、アジア太平洋戦争のさなか、1933年に創刊したメディア批判のメディアである。その既成ジャーナリズム批判は痛烈で、軍部や言論統制に迎合する新聞のあり方を糾弾し、同時に新聞人への殺傷事件や舌禍事件などを見逃さない。ファシズムが荒れ狂う時代に抵抗した数少ないジャーナリズムのひとつとして貴重な資料である。

復刻版 サラリーマン 全24巻・別冊1

長谷川国雄 主宰
昭和3年～11年刊
別　冊＝解説（田中秀臣）・総目次・索引
体　裁＝B5判・上製・総9、690頁
推　薦＝猪瀬直樹・奥平康弘・佐高信・杉原四郎・松浦総三
揃定価＝435、000円＋税

本誌は、1920年代末の昭和恐慌・大不況期、急速に増大したサラリーマン（俸給生活者）にとって受難の時代に創刊された「大衆経済雑誌」である。「新中間層」とよばれた彼らを「知識労働者」、インテリゲンチアとして自覚させ啓発することを意図した。財閥や企業を撃ち、国際問題を論じ、「サラリーマンは戦争に行きたくない」と非戦論を謳い、「働く者本位の社会」をめざした本誌は、経済史・思想史研究に必須の資料である。

復刻版 号外 全2巻・別冊1

東京記者聯盟 発行／昭和2年～3年刊
別　冊＝解題（河原功）・総目次・索引
体　裁＝B5判・A5判・上製・総894頁
推　薦＝堀切利高
揃定価＝35、000円＋税

1927年に成立した東京記者聯盟は、「専制と暴虐の反抗者であり民衆に対する真実の報道者であり、民衆に誤らざる見解と方針を与へる所の真に民衆の意志を尊重し従つて民衆の帰趨を具体的事実によつて指示する」ことを任務として機関誌『号外』を創刊した。普選実施にからむ既成政党の抗争、無産政党の活動ぶりを紹介し、治安維持法に反対して不当検束や検閲制度に抵抗したため、当局の厳しい監視を受けた。一年に満たない発行時期であったが、プロレタリア文学運動の隆盛期とも重なり、本誌の文芸欄を特徴づけている。近代政治史・メディア史研究の貴重な資料。

不二出版
〒一一三－〇〇二三
東京都文京区向丘一－二－一二
TEL　〇三－三八一二－四四三三
FAX　〇三－三八一二－四四六四
振替　〇〇一六〇－二－九四〇八四

表示価格は、全て税別

推薦します

山根真治郎『学報』復刻版の意義

春原昭彦

本書は、わが国最初の新聞人養成機関というべき「新聞学院」の発行した『学報』の復刻版である。この新聞学院については、名前は知っていてもその内容は（教員や在籍者を含め）ほとんど知られていないのが実情であろう。一般に日本の新聞教育機関は、一部を除き戦後、GHQの示唆によって作られたというのが通説だが、この『学報』を見ると新聞学院の教育は、戦後の大学新聞学科に全く劣らぬ記者教育機関であったことがわかる。学生は当時の（旧制）専門学校卒業生か大学生、一年以上の実務経験者、講師は一流の新聞人、教育内容も編集のみならず販売、広告、印刷から写真術、速記術、タイプまであり、座学、実習、見学を含め万全である。『学報』には在学生、卒業生の寄稿や各期の試験問題、その答案まで例示されている。貴重な資料である。

この復刻版の意義はもう一つある。『学報』は「新聞学院」の機関誌（非売品）だが、そこには毎号、講師、専門記者の論文が掲載されている。徳富蘇峰、緒方竹虎、鈴木文史朗をはじめ著名な記者が登場しているが、特筆すべきはほぼ毎号に近く掲載されている山根真治郎の論文である。力点は、報道の不法行為、誤報と訂正、名誉棄損の態様などで山根新聞法制論、誤報と責任論がここに展開されている。この内容は現在のジャーナリストにも必須の課題と言ってよい。

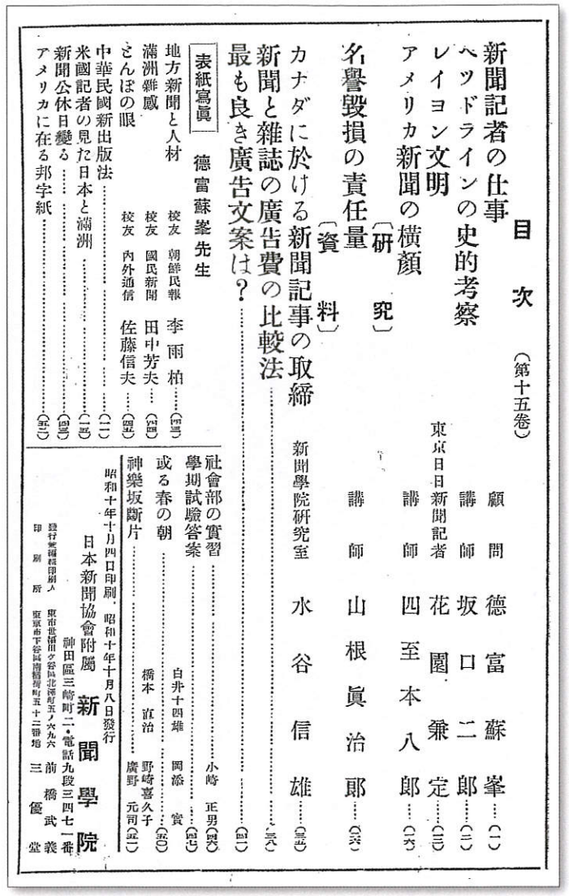
一言付け加えておくと、この学院には日本「内地」だけでなく大陸出身の学生もかなり在籍していた。また学院の卒業生も数多く朝鮮半島、中国、台湾の新聞社などに就職、活躍している。さらに女子学生も受け入れており、その校友は新聞・出版界で活躍している。いずれも院長・山根の見識だろうか。

（上智大学名誉教授）

山根真治郎略年譜

1884（明治17）年 9月山口県玖珂郡玖珂町（現・岩国市）に生まれる
1907（明治40）年 中央大学法律科卒業、同年9月「時事新報」記者となる
1910（明治43）年 「中央新聞」に転じる
1914（大正3）年 「国民新聞」に転じる。大正13年編集局長就任
1923（大正12）年 9月大震災により青山の自宅半壊
1925（大正14）年 「東京各新聞社編集局長会」座長に推され、新聞紙法改正案を作成
1926（大正15）年 逓信大臣の指名により、この年設立された「日本放送協会」理事に就任
日本新聞聯合社（後の同盟通信）理事に就任、いずれも昭和4年3月まで在任
1927（昭和2）年 2月急性肺炎で入院、5月退院。「商工審議会」（内閣）委員就任
1928（昭和3）年 「日本新聞協会」理事に就任
1929（昭和4）年 4月「国民新聞」取締役主幹就任、10月「臨時国語調査会」（内閣）委員就任
「国語協会」理事に就任
1930（昭和5）年 10月「日本新聞協会附属新聞学院」学院長となる。「臨時国語調査会」委員退任
1931（昭和6）年 4月「国民新聞」退社
1933（昭和8）年 「内外通信社博報堂」顧問就任
1935（昭和10）年 8月「新聞学院」学院長と「内外通信社博報堂」顧問を辞任
1942（昭和17）年 9月「中部日本新聞」編集顧問就任
1943（昭和18）年 6月「日本新聞報」顧問を兼務、10月「中部日本新聞」編集顧問退任、11月「東京新聞」常務理事編集局長就任
1944（昭和19）年 6月「戦時食糧増産推進中央本部」（農商省）参与就任（翌年同本部廃止につき退任）
1945（昭和20）年 5月戦災で自宅を焼失、世田谷区代田に移る
1946（昭和21）年 1月農林大臣委嘱により「食糧危機突破国民運動本部」（12月解散）本部長就任
9月「日本新聞協会」法制委員会委員に委嘱される、10月「東京新聞」退社
1947（昭和22）年 1月「東京タイムズ」相談役就任。10月公職追放非該当に決定、「農林省行政監察委員会」（農林省）委員に任命される
1948（昭和23）年 2月「徳島新聞」顧問就任、「東京タイムズ」相談役辞任
4月慶応義塾大学講師に就任（翌年辞任）
1950（昭和25）年 6月「中央大学白門ジャーナリスト倶楽部」会長に就任
1952（昭和27）年 7月脳膜下出血により死去、享年六七歳

◀第一五巻（一九三五年一〇月）



目次（第十五巻）

新聞記者の仕事　顧問　徳富蘇峯……（一）
ヘッドラインの史的考察　講師　坂口二郎……（二）
レイヨン文明　講師　花園兼定……（三）
アメリカ新聞の横顔〔研究〕　東京日日新聞記者　四至本八郎……（六）
名譽毀損の責任量〔資料〕　講師　山根眞治郎……（八）
カナダに於ける新聞記事の取締　新聞學院研究室　水谷信雄……（三五）
新聞と雑誌の廣告費の比較法　……（四一）
最も良き廣告文案は？　……（四一）

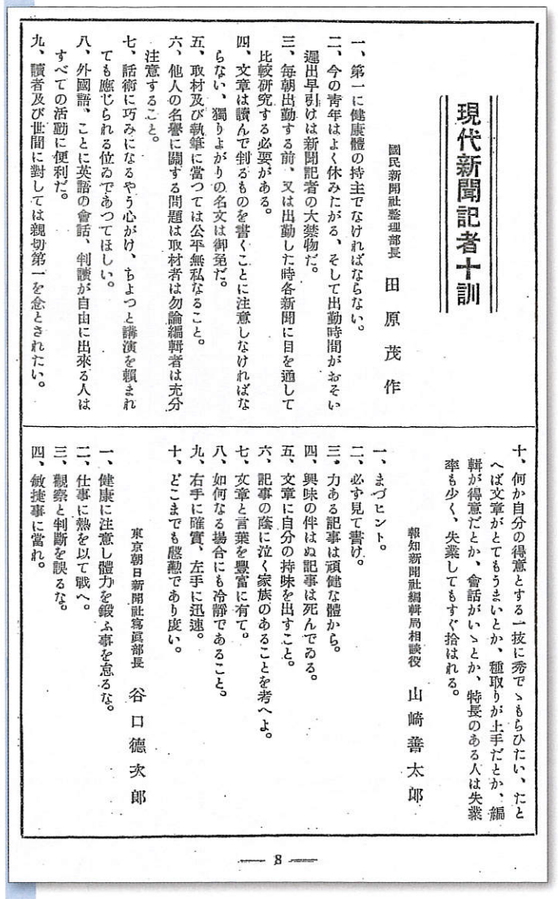
表紙寫眞　徳富蘇峯先生

地方新聞と人材　校友　朝鮮民報　李雨柏……（四四）
滿洲雜感　校友　國民新聞　田中芳夫……（四四）
とんぼの眼　校友　内外通信　佐藤信夫……（四五）
中華民國新出版法……（一一）
米國記者の見た日本と滿洲……（一四）
新聞公休日變る……（四四）
アメリカに在る邦字紙……（四六）

社會部の實習……小崎正男（四六）
學期試驗答案……自非十四雄　岡添賞……（四七）
或る春の朝……橋本宜治　野崎喜久子……（四八）
神樂坂斷片……廣野元司（四八）

昭和十年十月四日印刷・昭和十年十月八日發行
日本新聞協會附屬　新聞學院
神田區三崎町二・電話九段三四七一番
發行兼編輯印刷人　東京市麹町区富士見町五・六九六　前橋武義
印刷所　東京市千代田区神田駿河台二丁目十二番地　三省堂

◀第六巻（一九三三年六月）



現代新聞記者十訓

國民新聞社整理部長　田原茂作

一、第一に健康體の持主でなければならない。
二、今の青年はよく休みたがる、そして出勤時間がおそい。遲出早引はは新聞記者の大禁物だ。
三、毎朝出勤する前、又は出勤した時各新聞に目を通して比較研究する必要がある。
四、文章は讀んで判るものを書くことに注意しなければならない、獨りよがりの名文は御免だ。
五、取材及び執筆に當つては公平無私なること。
六、他人の名譽に關する問題は取材者は勿論編輯者は充分注意すること。
七、話術に巧みになるやう心がけ、ちよつと講演を頼まれても應じられる位のであつてほしい。
八、外國語、ことに英語の會話、判讀が自由に出來る人はすべての活動に便利だ。
九、讀者及び世間に對しては親切第一を念とされたい。
十、何か自分の得意とする一技に秀でゝもらひたい、たとへば文章がとてもうまいとか、鞭取りが上手だとか、編輯が得意だとか、會話がいゝとか、特長のある人は失業率も少く、失業してもすぐ拾はれる。

報知新聞社編輯局相談役　山崎善太郎

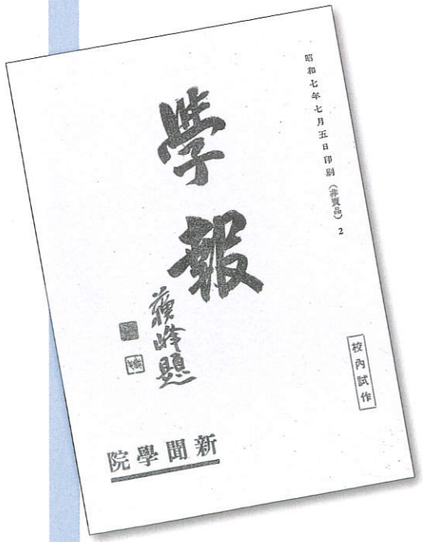
一、まづセント。
二、必ず見て書け。
三、力ある記事は頑健な體から。
四、興味の伴はぬ記事は死んでゐる。
五、文章に自分の持味を出すこと。
六、記事の陰に泣く家族のあることを考へよ。
七、文章と言葉を豐富に有て。
八、如何なる場合にも冷靜であること。
九、右手に確實、左手に迅速。
十、どこまでも感勵であり度い。

東京朝日新聞社寫眞部長　谷口德次郎

一、健康に注意し體力を鍛ふ事を怠るな。
二、仕事に熱を以て職へ。
三、觀察と判斷を誤るな。
四、敏捷事に當れ。

主要執筆者一覧

阿部賢一
飯守勘一
池田林儀
池部鈞
市川房枝
伊藤正徳
今井邦子
植原路郎
緒方竹虎
岡村二一
小川武
金井紫雲
金久保通雄
後藤朝太郎
小山松寿
斉藤種臣
四至本八郎
柴田勝衛
杉村楚人冠
鈴木東民
鈴木文史朗
高田市太郎
高田元三郎
千葉亀雄
寺田四郎
徳富蘇峰（徳富猪一郎）
刀禰館正雄
直海善三
成沢玲川
花園兼定
平竹伝三
水谷信雄
武藤山治
八重樫昊
簗田鈔次郎
山根真治郎
山野光雄

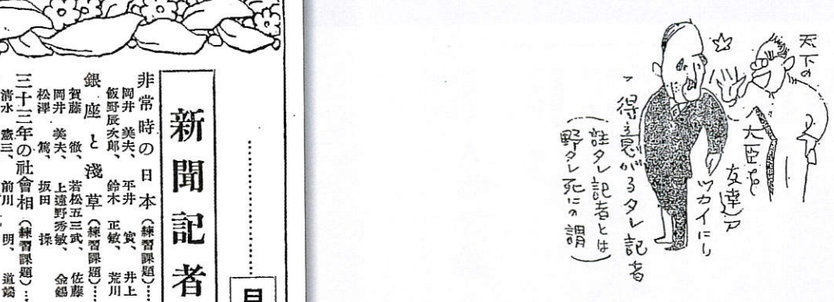


昭和七年七月五日印刷（會費金）2
學報
蘇峰題
校内試作
新聞學院

内容見本

目次

新聞人教育……講師 築田欽次郎（一）
リンデイ第二世誘拐事件と米國記者の活動……講師 棟尾 松治（三）
明日のニュース……齋藤 昌司（八）
羽ある老文豪……小川 清（七）
號外の鈴の音と……西村 上（九）
デパートの賣上……西村 健三（一〇）
淵見物……
階段を登る彼女の足首……李 雨柏（一一）
說明者受難の秋……飯塚潤一郎（一一）
寫眞—學院茶話會……（一二）
新聞記者の信條（ウイリアムス博士）……（一三）
銀座の柳（課題）……（一三）
編輯造庭論……講師 伊藤 正德（一六）
國際記者の良心……講師 上田 碩三（一三）
新聞經理學……（テキストノ一）……講師 杉江 潤治（一一六）
新聞發達の要素（課題）……（一七）
（佳作）……西村 健三
（佳作）……西川 清
新刊書を通じて……倉本 政春（一八）
閲讀室……萱原 茂夫（一八）
首相官邸を覗く……園田太郎吉（一八）
廣さと深さ……牧 章一（一八）
新聞廣告の働き……蘆田 恒二（一八）
大賣本主義新聞と弱小新聞の將來……西尾平八郎（一八）
時事片々（課題）……（一八）
石井正之助、細川健二、齋藤昌司
小川 清
上洲沼田にて（畫）……齋藤 種臣（一九）
五月を讃える……萱原 茂夫（一九）
窓……石井正之助（一九）
東京の記者を見て……盛田 文雄（一九）
講師の顔（漫畫）……福戸比沙思（一九）
五月（俳句）……細川 健二（一九）
花（課題）……關谷七郎、小川 清
細川健二、
石井正之助、西尾平八郎
清洲國會見……齋藤 一男（一八）



訪問記事作習（課題）……（一一）
米田貴博士……小田 信行
天龍はかく語る……福戸比沙思
昭和乘馬クラブ……古谷 遥三
無言の大西郷……日下部 要
元田國東翁……亀井 悦夫
町田忠治氏……倉田 英篤
木内キヨタ子さん……今井 秀正
平凡寺問答……關谷 七郎（一二）
入學試驗答案……細川謙二（一二）
西村 上、齋藤昌司、
小川 清、山本廣治、桂田增三
清水憲三、平山武夫、兵頭芳夫
大西象八、福士忠、錄田重憲
原口藤太郎、佐藤陸三
校内記事……（一三）
學生名簿……（一八）
題字（築田顧問）
學報第一回編輯委員
石井正之助、飯塚潤一郎、伊藤正雄
原口藤太郎、西村 上、西川健三
西尾平八郎、細川 謙二、兵頭芳夫
李 雨柏、大西 象八、小川 清
齋藤 昌司
昭和五年五月二十日印刷
新聞學院
（非賣品）
神田區三崎町三ノ一八八
電話九段三八四九

◀第一巻（一九三二年五月）

研究

報道抑壓に關する立法傾向

講師 山根眞治郎

（一）事前禁止の法文化傾向
（二）警保當局食の制限態度
（三）法律用語の彈力性

言論報道と云ふ言葉の中には、たゞ表面に現はれた平凡單調な問題や事件を、毒にも藥にもならないやうに評論したり報道したりすることでなしに、もつと深いもつと透徹した意味の含まれてゐることを見忘れてはならない、權力者が喜び俗論が驕逸してくれるやうな評論は、實は評論ではなくて體辭であり無批判であつて、これによつて人心を指導し文化を高めることは絶對に望めないのである、批判は或る意味に於ては抗爭であり亂樣であり非難であり立入りであつて人生にも自然界にも、ひとしく營まれる進化への道程である、同じ意味に於て誰もが喜び誰もが差別無しに受け入れる報道は、實は報道でなくてお太鼓であり門附けであつて、これによつて社會を裨益し人文に貢獻することは到底望み得ないことである、社會生活は鬪爭の生活であり、鬪爭の反覆が進歩であると云ふのはそのためであつて、言論報道の權域の由つて來る處も、一にこゝに存するのである、憲法第二十九條が殊更に言論の自由を規定したのは、畢竟こうした動機や立入りを豫想した用意に出てたものであつて、

▶第一八巻（一九三六年六月）

▲「十周年記念在京校友大会」（1941年11月発行 第31巻表紙より）

新聞學院學則

本校ハ新聞通信社ノ記者經營者タルニ必要ナル學理ト實際トヲ敎授シ併セテ新聞ニ關スル調研究ヲナスヲ目的トス

學科ヲ左ノ二ニ分チ修業年限ヲ各一年トス

編輯學科
經營學科

學科ハ兩科ヲ兼修スルコトヲ得

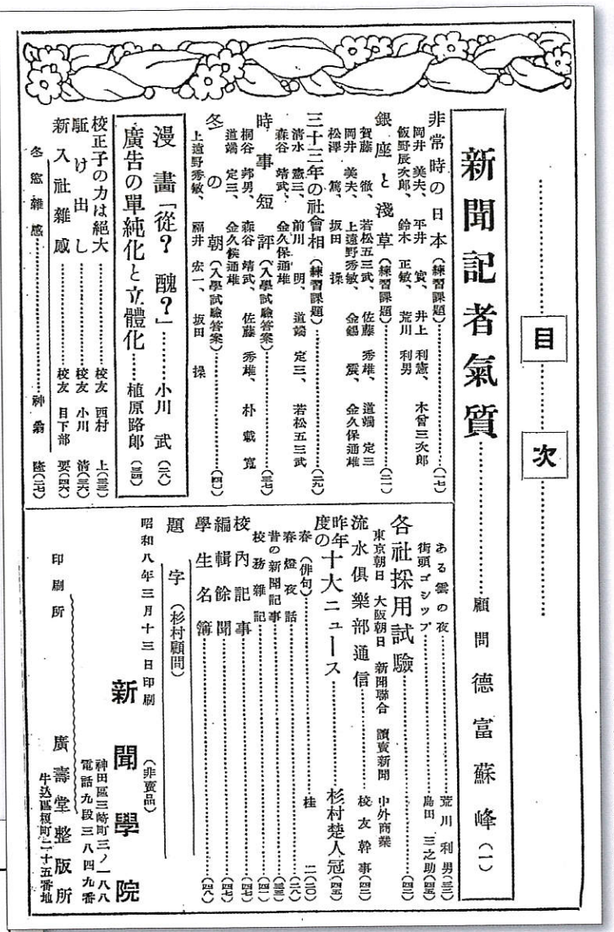
學年ハ四月ニ始マリ翌年三月ニ終リ之ヲ左ノ三學期ニ分ツ

第一學期　自四月十日　至七月二十日
第二學期　自九月十日　至十二月二十日
第三學期　自一月十日　至三月二十日

講座ヲ左ノ如ク定ム

新聞概論　言論史

◀新聞学院学則案（一九三一年一〇月）

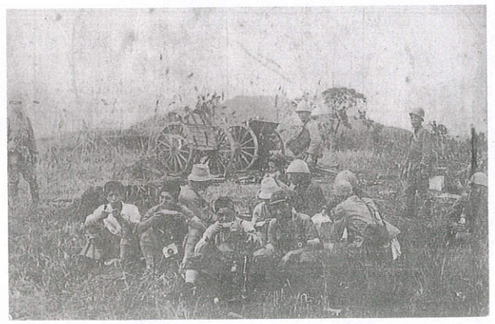


目次

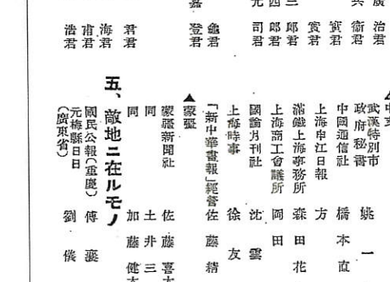
新聞記者氣質……顧問 德富蘇峰（一）
非常時の日本（練習課題）……（一七）
岡井 美夫、平井 寅、井上 利憲、
飯野辰次郎、鈴木 正敏、荒川 利男、木曾三次郎
銀座と淺草（練習課題）……（二一）
賀藤 徹、若松五三武、佐藤 秀雄、
岡井 美夫、上遠野秀敏、道端 定三、
松澤 篤、坂田 操、金鎧 賢、金久保通雄
三十三年の社會相（練習課題）……（二六）
清水憲三、前川 明、道端 定三、若松五三武
森谷 靖武、金久保通雄
時事短評（入學試驗答案）……（三七）
桐谷 邦男、森谷 靖武、佐藤 秀雄、朴 載寛
道端 定三、金久保通雄
冬の朝（入學試驗答案）……（四二）
上遠野秀敏、福井 宏一、坂田 操
漫畫「從？醜？」……小川 武（一六）
廣告の單純化と立體化……植原路郎（三四）
校正子の力は絶大……校友 西村 上（三三）
駝け出し……校友 小川 清（三六）
新入社雜感……校友 目下部 要（一八）
冬窓雜感……神翁 陸（一七）
各社採用試驗
東京朝日 大阪朝日 新聞聯合 讀賣新聞 中外商業
流水倶樂部通信……校友 幹事（三一）
昨年十大ニュース……杉村楚人冠（一八）
ある雲の夜……荒川 利男（三三）
街頭ゴシップ……島田 三之助（三三）
春燈夜話……桂 二（一〇）
春の新聞記事……（一六）
校務雜記……（三三）
校内記事……（三一）
編輯餘聞……（一三）
學生名簿……（一八）
題字（杉村顧問）

昭和八年三月十三日印刷
新聞學院
（非賣品）
神田區三崎町三ノ八八
電話九段三八四九番
印刷所 廣壽堂整版所 牛込區榎町二十五番地

◀第五巻（一九三三年三月）



▲「北支第一線の従軍記者」（1937年10月発行 第23巻表紙より）



事變と校友

（昭和十四年六月末調）

校友ニシテ事變ニ出動シタモノ及ビ支部ニ在ルモノ左ノ如シ。

一、從軍記者

讀賣　小川 清君
同　原 四郎君
報知　宮原 宇吉君
滿洲日日　佐々木知一君
德島日日　佐藤 緒君
讀賣　金久保 進君
朝鮮民報　李 雨柏君
讀賣　若松五三武君
大阪朝日　道端 定三君

二、出征應召

朝日　西村 上君
國民（除隊）　石川 忠司君
電通　稻次 愼一郎君
同　麻生 一郎君
內外通信（除隊）　佐藤 信夫君
同　德島 正男君
ジヤパンタイムス　種口 巖君
上海商工會議所　岡田 務君
松竹少女歌劇宣傳部（除隊）　水野 彌太郎君
大阪日報　河谷 日出夫君

三、戰死

讀賣　山本廣治君
小松兵衛君
岡部 寅君
天野 岡部君
浦田三郎君
影澤四郎君
廣野元司君
岡江 龜君
中島嘉登君

四、現地在職

▲北支
民團新民會調査科主任　陳 菱君
新天津報社長　劉 渤君
同　社員　穆 海君
天津益世報　尤 浩君
興亜機關雜誌　王 敎祐君
興亞院華北連絡部　藤井 彰君
同　手塚一郎君
北支軍司令部宣撫班　岩堀寛之助君
北支鐵路總局　白倉 甚吉君
北寧鐵路總局　劉 承年君
厚生科　高 丙乾君
臨時政府特任專員　
事務官兼書記官　
▲中支
武漢特別市政府秘書　姚 一新君
中國通信社　橋本 直治君
上海申江日報　方 治君
滿鐵上海事務所　森田 花子君
上海商工會議所　岡田 務君
國論月刊社　沈 龍君
上海時事　徐 雲君
「新中華畫報」經營　佐藤 精一君
▲廣東
廣藤新聞社　佐藤 喜太郎君
同　土井 三君
同　加藤 健太郎君
國民公報（宣撫）　傅 瀛君
同　元梅縣日日（廣東省）　劉 儀資君

◀第二七巻（一九三九年七月）